

豊かな心と確かな学力をはぐくむ人間関係推進プログラム  
～これからの生徒指導・教育相談・特別支援～

講師 広島大学大学院教育学研究科  
附属教育実践総合センター  
栗原 慎二 先生

栗原先生のお話を聞いて、「なんだかスッキリした」、「今後の取り組みの方向性が見えた」、「生徒指導や教育相談の理解が深まった」と感じられた方も多いのではないのでしょうか。私もその一人です。

まず、アセスの活用の仕方、見方についてです。以前、勤務していた学校でアセスを行いました。そのとき、ある先生が「あの子にはけっこう手をかけているつもりだったのに、“担任の先生は…”という項目が“1”でショックを受けた」と話していました。確かにあまりいい感じはしません。でも、Q-Uが教師のリーダーシップをみるTM理論をもとにしているのに対し、アセスは子どもがなんで困っているのかをみる学校適応感理論をもとにしているということがわかり、心が軽くなりました。そして、あの子の先生にこのことをしっかりと話してあげたかったなと思いました。ただ、その先生はその後、意識して“1”をくれた子どもたちとふれあうようになり、子どもが変容していくのを感じることができたそうです。

また、日頃から保健室を訪れる子どもたちのコミュニケーション能力の未熟さが気になっていましたが、「学校適応感の構造の相関関係」の図で納得することができました。「向社会」からは4本の矢印が出ており、これが「鍵」になっています。でも、人間関係づくりが“ヘタ”なために、学級に居心地の悪さを感じていた、それを言語で表現できない、体の不調で表現する（訴える）ということなのではないかと思いました。

次に、「集団」と「集合」についてです。学級が集団ではなく、集合になっている…まさか、そんなことが…とってはみましたが、思い当たる節があります。保健室に届けられた健康観察のカードを見ながら、登校をしづりがちなA君と同じ学級の子どもに「今日、A君はもう教室にいた？」と聞くと、「わかりません」と言うので、「同じ学級の子だよ。見てないの？」とさらに聞くと、「だって友だちじゃないもん」と答えました。これが、学級が集合の場になっているということなのではないのでしょうか。「一緒に遊んだり、よく話をしたりする“友だち”ではないかもしれないけれど、同じ学級の“仲間”でしょ」と、一言いわないではられない気持ちになります。

最後に、SELについてです。先日、心の健康の授業の中で、「泣いている子ども」の写真と「笑っている子ども」の写真を見せ、「この写真を見てどんな気持ちがしますか？」と聞いたときに、何人かの子どもが「何とも思わない」、「知らない子どもだからどうでもいい」といった意味のことを話しました。これには驚きました。でも、これが“今時の子どもたち”の現状なのかもしれません。だから、SELが必要になってくる…そんなふうに思いました。

栗原先生のお話を伺いながら、多くの子どもたちが頭に浮かびました。そして、これまで「何となく気になっていた」子どもたちのことや「何かしなくてはいけない」というもやもやした思いは、「こういうところが気になっていたんだ」、「こういうふうに取り組めばいいんだ」という思いに変わりました。それも、先生のこれまでの多くの実践や研究から導き出された、理論に触れることができたからではないのでしょうか。栗原先生、ぜひまた弘前へ！